

昭和55年2月1日第2種郵便物認可
平成5年6月1日発行第1回1日発行
俳句雑誌 沖 第24巻第6号

俳句雑誌「おき」



6月号

沖
発行所

こころの沖

林 翔

睨まれたわけ

床屋で順番待ちをしている間、待合席には漫画本と新聞しか置いてないので、いつも新聞の拾い読みで済みますのだが、今月は珍しく『いちずに一本道』という相田みつを著の文庫本があった。早速読み始める。最初の方には著者の旧制中学時代に軍事教官にいられた事が書いてある。ひどい時には教官室に長時間正座させられたとのこと。私も旧制中学時代に軍事教官と体育教師には始終叱られていた。自分の運動神経が鈍いせいでと諦めていたが、時には何でこんなに睨まれるのだろうかと思ってしまう。

風も神妙黄金浄土の山吹に
桜葉踏みゆく先を彼岸とも
嫩葉あり花あり枝垂桜かな
垂るることまだせぬ藤の幼な咲き

卒業後に父が初めて明かしてくれたのだが、合格発表の前日、父が開成中学校の教官室に呼ばれたのだそうである。そこには体育科の教師も列席していた。軍事教官が父に向かつて「あなたの息子さんは入試成績は四番だから秀才には違いない

藤房が指すは地軸よ風なき日

かたくりや昔をとめは俯向きし

囀りがピアノニツシモに混り入る

しやぼん玉その連れ舞ひを風囃し

満天星は残る雫か雨後の晴

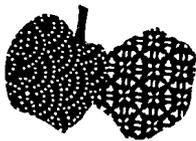
登四郎忌こころの沖に波もなし

が、いかにも体格が貧弱だ。体が弱

くは開成の五年間は無理だから不合格にしようと思つた。及落会議で主張したのだが、学科の先生方の反対で合格になつてしまつた。親御さんの方から自発的に合格を辞退して、もつと易しい中学校に変更したらどうか。」と言つたそうである。父は怒つて、席を蹴つて歸つて来た由。教練と体操の教官・教員に五年間睨まれ通した理由がやつとわかつた。

相田みつを氏の著書で遠い昔の事を思い出した次第だが、教官や体育教師の思わくに反して、私は一度も休学する事なく五年間で卒業した。

林
翔



梨花冷

能村 研三

働く者の俳句

北上市にある日本詩歌文学館の今年の常設展は「働く人たちの詩歌」と題して、詩歌作家が作品を寄せている。私にも俳句の依頼があったので、出品することにした。

一日で橋を架け替ふ冬景色

句集『鷹の木』に収められている一句で、私はこの句を選んだ。その解説には、「橋といつても、土水路という小さな小川に架かる木製の橋だが、村人にとって日常の生活には欠かせない。橋の架け替え作業は冬の濁水期に行うのが普通で、蕭条とした冬景色に職人の手際よい動きが清々しい」。

春潮が見えて着陸降下かな
ものを書く音にも個性目借どき

朧夜の湯葉づくしとは物足りぬ

この企画の趣旨は、「働く」ことは、古くは高貴な者のすることではなく、卑賤なこととされていたが、現代になってこの考え方が一変し、仕事そのものが多様化すると共に、自らの生きる情熱を傾ける場として「働く」ことを捉えられるようになり、これを詩歌のそれぞれのジャンルで表現されるようになった。

私も俳人であると同時に、勤労者として現役でいることから、推薦を受けたのではと勝手に解釈をした。父が昔出版した角川書店の「現代俳句作法」の中で、「働く者の俳句」という表題を掲げて一項目を執筆し

春 愁 や 父 の 蔵 書 の 配 列 に

梱 包 の 掛 紐 締 む る さ く ら 冷

畦 を 塗 る 牛 臥 の 嶺 を 背 に し

父 亡 く て お ぼ ろ 月 日 の 三 回 忌

悼

遺 品 と な る 水 木 洋 子 の 春 帽 子

梨 花 冷 の 親 族 の な き 葬 り か な

ている。その中で「我々人間のほとんどもが働いて食べているものであるから、自然とその働いていること自体が俳句の中に表れてくるようになるのは当然のこと、このことは詩や短歌にも現れた著しい傾向で、毎日生きていることに感謝するのと同時に、働くことによって生ずる喜びを、この平易な短詩でつづつていくことは、なんととっても意義が深いこと」と述べている。

この本は昭和三十年代に出た本であるが景気低迷が続く現代にまた、人々が原点回帰の意味で「働く」ことに関心を払い、そこに喜びを感じることは大切なことであると想う。なお、会期は今年の五月から来年の三月二十一日までである。

* 能村研三

〈お詫びと訂正〉

五月号の「心当てる土橋に遭ふて探梅行」は「遭うて」の誤植でした。お詫びして訂正いたします。

（編集部）



蒼茫集

よき返事

吉田政江

夜桜へ走らせボンネット熱し
田水張り四角い空を愛でにけり
遅桜色よき返事待ちにけり
そこに来て列みだれ出す蝮蛇草
菊根分部厚き指を余しをり
潮濡れの岩によろけて搗布採

くれなゐ

田所節子

林先生那須野句碑建立に際し
紅梅を天蓋に碑の地鎮祭
句碑建つを待つくれなゐの梅の樹下
枸杞の芽を摘みし手洗ふ潮だまり
鶉や椿の花びら嘴につけ
花冷の椅子ひとつ足す通夜なかば
枢出てかげろふへ礼深くせり

啄木忌

坂本俊子

人去りしあと花守に闇ゆたか
人の世の苦み目刺のもちてをり

身の程の落あをあと茹でし夜
命なき砂さらさらと啄木忌
父の忌や春夕焼の痛かりし
何事もなくて春愁深くせり

歩

長谷川鉄夫

はくれんへ一步を試す幼靴
桜冷採血の腕捧げをり
鯉池の二次元統ぶる水馬
花流る筏組みてはほどきては
赤芽垣まばゆく過ぎるランドセル
蛇苺ほどの嘘つく齡かな

春の畦

斎藤棹歌

愕然と体重ありぬ春の畦
花人に蹤きて歩幅を思ひ知る
春大根髪根ねんごろなりしかな
落椿おどろきの黄の長捷毛
どの枝となく乗り出して八重桜
人待つて動く階段菜種梅雨



潮鳴集

紅梅

柴崎英子

紅梅の色をふかめて師の碑暮る
師の墓に背をまるめてあたたかし
子が越して来る青芝のかがやきに
好きな事言へて笑ひてさくら餅
花びらを踏みやはらかき脛脛

駘蕩

中島あきら

駘蕩や耳の奥から葉の湧き
裂帛の風の音して鳥の恋
土筆生ふ天に告知のあるやうに
玉音を聴きしあたりの糸ざくら
花万朶樹液いよいよ熱からむ

初ざくら

尾高せつ子

初ざくら千鳥が淵に刻逝かす
戦没者墓苑のしじま山椿



青銅の屋根ぬれ色に花明り
別れ幹おほらかに春抱きをり
括られし枝のつぶやき植木市

雪間草

鎌田亮

雪間草そこだけ風の見えてをり
髪切つて帽子のゆるぶ木の芽風
下萌の畦来て長き立話
白鳥の引きて無傷の川面かな
畦焼くやすぐ風神の怒り出し

輪郭

尾上直子

かな用の小筆買ひたき弥生かな
花種を蒔いて訣れを悲しまず
思ひにも輪郭ありやかぎろへる
水牛の分厚きねむり花樽
早苗田に縮羅しじらの風の近江かな

沖作品



能村研三選

竹籬の切り口にほふうす湿り

愛知

柴田 近江

若鮎の瀬奔りに日の昏みけり
鐘撞きて臙ざざめく比良比叡
相和せる水かげろふと蝶の影

一島の日和余さず白子干す
蕉翁の見ざりし八十路寒やいと

千葉

廣島 泰三

手庇に光る川波甲斐の春
墨の香や心鎮めの春夕べ
露のたう内緒話に日が射して
波しぶき磴に躲して焼柴螺

岩手

佐藤 みほ

来し方の己を許し春炬燵
水と化すあはひの色に白魚かな
ものの芽の尖るは目指す形にて
まんさくの花びら風をちぢれさす

種浸す息吹の泡をひとつづつ
屋敷林の奥あたたかき三輪車
初蝶やうす日を集む磧石

千葉

谷口みちる

目借どき拍手一瞬おくれけり
逃水を追ひきて海の通せんぼ
霾やラジオの声のくぐもりて
陽炎を膨らまし来るオートバイ
遠足やパンタグラフが来て止まる
隠し絵にスコップ二つみどりの日
永き日や象形文字の謎めける
象の耳より春風となり来たる
ものの芽に雀の胸毛やはらかし
花ふぶき真只中のすべり台
校長の訓辞長引く朝桜

市川市

近藤 栄治

長崎

有川万里子

蛇穴を出る蒟蒻が手をすべり
まろばせて洗ふ二月の醜桶
落つるべきところへ落ちし椿かな
若さとは地をすれすれのつばくらめ

愛媛

渡部 義雄

しづかなる句集の余白春の雨
万愚節南アルプス市が生まれ
白昼の何も見えない目刺の目
春昼のときを啄む鳩時計

山梨

長岡 新一

初咲きに落つる危ふさ山椿
折り返す轍の深み斑雪山
火臭きは男の匂末黒道
穂の芽の一寸の空限りなし

京都

おかたかお

風光る分けても峽の水こだま
清明や硯に慣らす筆の先
青海苔の真水にもどる桜冷
春愁ひ検眼表の輪に切れ目

長野

高橋あゆみ

遠つ嶺に蝶翔ぶごとき斑雪
川底に太陽吸はれ蝌蚪生まる
花種の残りて風に乗せにけり
川野辺の町の明るさ花林檎

千葉

峰 幸子

啓蟄やこだまの光る山の雲
雛の箱明治の文字でありにけり
菓子鉢の螺鈿が光る涅槃寺
日輪の研ぎ澄まされて水草生ふ

長野

矢崎すみ子

切返し多き車庫入れ囀れり
あたたかや和菓子銘は絹の里
めつむれる鑑真和上黄砂降る
野焼の火意志あるごとく走りけり

山梨

長岡 千波

山中にはしる水音啄木忌
木道のここにて尽きぬ座禅草
薬のはやくれなみに風のなか
山よりの風まだつよき厩出し

岩手

栗城 静子

新人賞予選句（六月）

若鮎の瀬奔りに日の昏みけり
蕉翁の見ざりし八十路寒やいと
ものの芽の尖るは目指す形にて
屋敷林の奥あたたかし三輪車
遠足やパンタグラフが来て止まる
象の耳より春風となり来たる
若さとは地をすれすれのつばくらめ
万愚節南アルプス市が生まれ
火臭きは男の匂末黒道
風光る分けても峽の水こだま

柴田 近江
廣島 泰三
佐藤 みほ
谷口みちる
近藤 栄治
有川万里子
渡部 義雄
長岡 新一
おかたかお
高橋あゆみ

沖作品 選後句評

*
能村研三

若 鮎 の 瀬 奔 り に 日 の 昏 み け り

柴 田 近 江

柴田近江さんは、愛知支部に所属し沖にも古くから在籍する人だが、昨年の奥三河の吟行の時その活躍に注目した。今回は佳句が揃っていたので巻頭にした。稚魚の遡上を詠んだものだが、秋に下流の早瀬の石に産卵され孵化した稚魚は海まで下り冬を過ごし、春海と川の温度が同じ頃になると川を遡上し始める。この句からもその遡上の数がたくさんであったことがわかる。中七の「瀬奔り」という表現がうまい。「奔る」は「走る」と違って、ぱつと勢いよく駆けるとか、向こうみずにどんどんかけることを言うように、特に機敏な動きが強調されている。昔は何万尾が遡上したと言われるが、日が昏むほどというから、一瞬間が黒帯のように見えたのかも知れない。

蕉翁の見ざりし八十路寒やいと

廣島 泰三

蕉翁とは芭蕉のこと。芭蕉の忌を尊称して「翁忌」と呼ぶこともある。芭蕉は享年五十一歳、いまでは壮年といってもよい年齢だが、当事はほぼ平均年齢といってもよい年齢であったのか。廣島さんは、現在八十の齢を越えてもなお矍鑠としておられる方。もし俳聖といわれた芭蕉が自分の齢まで生きていたとしたら、図り知れない偉業を私たちに残してくれただろうと思った。自分は、蕉翁の経験していない八十路を越えて寒の灸をすえながら俳句の勉強をする喜びを覚えているのである。

ものの芽の尖るは目指す形にて

佐藤 みほ

佐藤さんは東北の岩手の人。雪が深いため春の訪れを待つ気持は深いものがある。「ものの芽」というのは、木の芽、草の芽を区別をつけずに言い、早春に芽吹くもの全体をさす。久しく青いものが見えなかつた時、土の上に草の芽が萌えはじめ、空を背景に木々が芽をつけるのは譬え様もなく自然の力のありがたさを感じる。春を待つ気持は、草木と共に人間も同じで、冬の間に抑圧されていたものが一気に噴出し何かをを目指す気持も逸る。作者は、「ものの芽の尖る」形にまさに自分自身の心を見たのであろう。(以下略)